和顔愛語

寺報

令和４年７月号

なむあみだぶつは自分にも故人にも大きな功徳

源頼朝と北条政子の像

画像提供：PIXT

鎌倉殿の十三人。今年の大河ドラマのタイトルです。俳優の小栗旬さんが演じる北条義時を主人公として鎌倉時代の北条氏の姿が描かれています。「いい国作ろう鎌倉幕府」という語呂合わせで１１９２年に鎌倉幕府が開かれたと記憶をしている人も多いと思いますが、近年の教科書では１１８５年と書かれているそうで、歴史というものもどんどん進化するようです。

この時代は、浄土宗を開いた法然上人が活躍した時期と重なります。法然上人は１１３３年に現代の岡山県で生まれ、１２１２年に京都で亡くなりました。法然上人は死後評価されただけではなく、生きているときから有名なお坊さんだったようで、『徒然草』や『平家物語』といった有名な書物にもその名を見ることができます。当時の摂政として政治の中心にいた九条兼実（くじょうかねざね）に教えを説くなど貴族にも影響力を持ち、また平氏・源氏といった武士にも信奉者がいたようです。源頼朝の妻である北条政子とも手紙のやりとりをし、彼女の抱える苦悩に答えていました。

大河ドラマを見ていると源平合戦では多くの死者がでて貴族社会から武士社会への変化は平穏無事にいくものではなかったことがわかります。その中で心を痛め、仏教に救いを見出した人々がたくさんおり、そういった人々が当時のお坊さんのなかでも有名であった法然上人に助けを求めたのでしょう。上人もその切なる願いに様々な形で応えました。

「なむあみだぶつ」ととなえることが最も大切な仏教の修行であり、それは大きな功徳があって自分のためにも亡くなった人のためにもなるという法然上人の主張は、戦乱で財産を失ったり、大きな傷を負って厳しい修行ができなくなった人々にとって大きな救いになりました。その教えは様々な時代で苦しむ人に届き、穏やかな暮らしを得るヒントとなりました。法然上人の言葉には、今を生きる私たちにとっても、穏やかに生きる大きなヒントが秘められています。

お経の意味を知ろう⑧ ～日常勤行式編～

[一枚起請文]

浄土宗では「日常勤行式」と呼ばれる式次第に則って読経します。式次第に書かれているお経（偈文）について毎号解説します。

唐土我朝に、もろもろの智者達の沙汰し申さるる、観念の念仏にもあらず。また学問をして念仏の心を悟りて申す念仏にもあらず。ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して疑いなく、往生するぞと思いとりて申すほかには別の仔細候わず。ただし三心四修と申すことの候は、皆決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思ううちに候なり。このほかに奥深き事を存ぜば、二尊のあわれみにはずれ、本願にもれ候べし。念仏を信ぜん人は、たとい一代の法をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無知のともがらに同じうして、知者のふるまいをせずして、ただ一向に念仏すべし。

証のために両朱印をもってす。

浄土宗の安心起行この一紙に至極せり。源空が所存このほかに全く別義を存ぜず。滅後の邪義をふせがんがために所存を記し畢んぬ。

建暦二年正月二十三日　大師在御判

【概要】

一枚起請文は法然上人が亡くなる2日前に、お念仏の肝要をしたためた一枚の紙です。念仏者としての心持ちや実践が記述されており、浄土宗では御遺訓として大切にされています。

【意訳】

私が説く念仏の教えは中国や日本の学者達がお説きになっている仏様の姿や浄土の様相を思い浮かべるという観念の念仏ではありません。学問をして、念仏の意味を理解してとなえる念仏でもありません。極楽浄土に往生するためには「南無阿弥陀仏」と声に出して、必ず往生できるのだと思いを込めて念仏をとなえる他になにも細かいことはいりません。ただし三心といわれる念仏者の心の持ち方、四修といわれる修行のあり方は南無阿弥陀仏と口にとなえ往生したいと信じるうちに必ず具わるのです。

もし私がこのほかに奥深いという事を知っているならば、お釈迦様、阿弥陀様の二尊の慈悲の心からはずれ、本願（南無阿弥陀仏とおとなえすれば必ず極楽往生できる）による救いからもはずれてしまうでしょう。

念仏を信じる人はたとえお釈迦様が生涯をかけて説いた教えをよくよく学んでいたとしても、自身は何もしらない愚か者であると受け止めて、知者ぶったふるまいをしないでただひたすらに念仏をとなえるのです。

以上に申し上げたことは私の教えとして誤りがないことの証明のため、両手印を押します。浄土宗の信仰心の持ち方（安心）と実践（起行）についてはこの一紙に書き記したことに極まります。私源空（＝法然上人）が思うところはこれ以外には一切ありません。私の亡きあとに誤った考えがでないように、思うところを記しました。

建暦2年1月23日

源空花押（法然上人の署名と印）

法然上人御真筆「一枚起請文」
大本山金戒光明寺所蔵

法然上人の両手形が残っているのが確認できる。

※今号の「浄土宗の基礎知識」はお休みします

法話シリーズ

伝えたい言葉（7）

知者のふるまいをせずして ただ一向に念仏すべし

（法然上人御遺訓「一枚起請文」より一部抜粋）

〈現代語訳〉

知恵のある者のようなふるまいをしないで、ただひたすらに南無阿弥陀仏ととなえなさい

今回は2面に関連して「一枚起請文」から抜粋しました。

法然上人の80年の生涯は『四十八巻伝』という絵巻物にまとめられています。国宝となっているこの絵巻物によれば、法然上人は建暦2年正月の2日から体調を崩され同25日に亡くなられたと記されています。

これを遡ること5年前の建永2年（1207）、当時としてはかなりの高齢者であった法然上人は、奈良の大寺院から「法然の説く念仏をやめさせてくれ」という声が上がり、また上人の弟子が後鳥羽上皇の怒りを買うなど、お念仏の教えに逆風が吹きました（建永の法難）。法然上人はお念仏の教えの代表者として慣れ親しんだ京都を追放され、讃岐（香川県）へと流されることとなりました。交通手段は徒歩と、船での移動です。上人はこの旅の中で自分が死ぬかもしれないと考えていたようですが、同年末に太政大臣を経験した藤原頼実などのとりなしにより、大阪まで戻ってくることができました。いずれにしても、高齢の身に長旅は応えたことでしょう。建暦元年（1211）ようやく京都に戻った法然上人ですが、体調がすぐれない日が多かったようです。そして、翌年の正月になり、いよいよ最期の時が迫ってくる状況となりました。

法然上人涅槃図／大本山金戒光明寺所蔵

年明けから大きく体調を崩した法然上人は、同23日から大きな声でお念仏をとなえ始めます。一枚起請文は、このような臨終が迫る中、弟子達の願いによって記されました。

翌日も夜からお念仏をとなえ始め、25日の午前10時頃までその声は続きました。弟子達も法然上人に一人で念仏をさせまいと、かわるがわる声を合わせてお念仏をとなえ続けました。やがてその声はだんだんと小さくなり、この日の正午に息を引き取りました。

自分の説いてきたお念仏の教えを端的にまとめた一枚起請文は、浄土宗の教えのエッセンスともいうべきものです。死を目前にしてもなお、法然上人は恐れることなく一人の念仏者として極楽往生のためにお念仏をとなえ続けました。その姿こそが「智者のふるまいをせずしてただ一向に念仏すべし」という言葉を体現したものであり、すべての念仏者が見習うべき姿でありましょう。命尽きるその時まで、お念仏を頼りとして歩むことが、浄土宗信者の理想の生き方です。

Q&Aですぐわかる！なるほど浄土宗 ⑧

身近な仏教の疑問をQ&A形式で説明します！

――法要中に綺麗な花吹雪のような紙が撒かれました。どういうものでしょうか。

――法要中に、「散華（さんか）」と呼ばれる美しいデザインの紙を撒くことがあります。散華は花びら、特に蓮の花びらを模してつくられたものです。もともと仏様を供養するため、花びらを撒くことを「散華」と呼んでいましたが、今では撒かれる紙も散華と呼んでいます。

インドでは仏教寺院に限らず、様々な生花を神様にお供えすることが供養の一つとされています。仏教もこの伝統を受け継いだのでしょう。お経にも花をもって仏様を供養することの功徳が説かれています。花びらだけではなく、花輪や生花も仏さまへの大切な供養であり、お仏壇やお墓に花をお供えするのもその一つです。

金色の器に載（の）っているのが散華。模様や大きさはさまざまある。

法要では「華籠（けこ）」と呼ばれる器の上に散華をおいて、読経に合わせてそれを撒きます。これは仏様の供養であるとともに、『阿弥陀経（あみだきょう）』というお経に説かれる、日に6回、空から美しい花が降ってくる極楽浄土の様子をあらわすものでもあります。散華の儀礼は、音色のついたお経とともに行われることも多く、耳や目で極楽をより身近に感じる儀式となっています。法要中に撒かれた散華を持ち帰る方も多いと思いますが、極楽浄土の飾りつけとして、お仏壇に供えるのがよいでしょう。

住職あいさつ

令和元年、小笠原母島にある清見寺の施餓鬼会で「来年もまた来ますね」と檀家の皆様と約束しましたが、その年末にコロナウイルス感染症が始まり、それ以降、小笠原へ行く事は叶いませんでした。長年世話人を務めて頂いていた小高さんは、私が伺えない間も、墓地の清掃や花まつりなどの行事を取り仕切ってくださっていましたが、昨年お浄土へ御旅立ちになりました。

今年、2年ぶりに参ることが叶いました。小高さんはもう居りませんが、ご子息をはじめ、総代さん方がしっかりと管理して守ってくださっています。私は年に一度しか参れない住職ではありますが、とても温かく迎えてくださる母島の方たちには感謝の気持ちで一杯です。布教師だった曾祖父が繋げてくれたご縁を大切に、これからも兼務寺の一住職として、清見寺を守っていきたいと思います。

普照山　正定寺

■所在地
〒111-0036　東京都台東区松が谷2丁目1-2
■TEL：03-3841-1853　■FAX：03-3841-1777

紫金山　静蓮寺

■所在地
〒110-0004　東京都台東区下谷1丁目12-21
■TEL：03-3843-4034　■FAX：03-3843-3442

母沖山　清見寺

■所在地
〒100-2211　東京都小笠原村母島字元地122

代理墓参 承ります

コロナ禍でなかなかお墓参りにも行けない…そんなお声が多数寄せられましたので、住職が代理でお墓を掃除し、お参りをいたします。ご希望の方は、直接ご連絡いただくか、冥加料を現金書留にてご郵送ください。後日お参りの様子をお手紙にてお送りさせていただきます。